

アーサー・コナン・ドイル作

伊豆野 良江訳

クルンバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arthur Conan Doyle, Translated by Yoshie Izumo

第十四章 運命の日

エスターとわたしを居間に残して、父が寝室に下がったのは十時過ぎだった。父の足音はゆっくりと階段をきしませながら二階に消えていき、やがて遠くで扉を閉める音がした。

テーブルの上の粗末な石油ランプは、古びた部屋に不気味な光を投げかけ、彫り物を施したオーク材の羽目板を照らし出していた。肘掛けが高く背もたれのまっすぐな椅子が、幻想的な影を作っている。ぼおとした光に浮かび上がる、妹の不安そうな白い顔。まるでレンブラントの肖像画のようだ。

わたしたちはテーブルをはさんですわり、どちらも口を開こうとしなかった。時計のチクタクいう音と、時おり戸外で鳴くコオロギの声以外は、何一つ物音がしない。あまりの静かさになぜともなく恐ろしさがつつのり、通りかかった農夫が吹く口笛が聞こえたりすると、二人ともほっとして、それが聞こえなくなるまで耳を澄ました。

最初のうちは、妹は編み物、わたしは読書をするふりをしていたが、すぐにごまかしても無駄だと悟り、不安を胸に待つことにした。そして、薪がはぜたり、ネズミが羽目板の後ろを走るたびにびくつきとして、顔を見合わせた。部屋の中には重苦しい空気が漂い、わたしたちは不吉な予感に押しつぶされそうだった。

わたしは立ち上がり、玄関のドアを開けて新鮮な夜風を入れた。空にはさまざまな形の千切れ雲が流れていて、時々その切れ間から月が顔を出し、冷え冷えとした白い光を地上に注いでいる。戸口からはクルンバー館の森の一端しか見えなかった。屋敷は少し離れた丘からしか望めなかったが、妹がそこに行こうと言いだした。そこで、頭をショールですっぽりかぶった妹と一緒に、丘まで歩いてその頂に登った。

屋敷を見下ろすと、今夜は窓には明かりがともっていなかった。大きな建物のどこにも一条の光も見当たらない。巨大な黒い塊が木々の間からぬっと突き出ているところは、人の住居というより、巨人の棺に似ていた。

その光景は、張りつめた神経に恐怖を呼びさますに十分だった。わたしたちはしばらく

く暗闇をみつめていたが、やがて居間に戻ってきた。そして、座ってじつと待ち続けた。それが何なのかはわからないものの、何か恐ろしいことが起ころうとしているのを確信した。

十二時頃だっただろうか、妹が突然飛びあがって言った。

「何か聞こえない？」

耳を澄ませたが、何も聞こえない。

「ドアのそばに来て」妹の声は震えている。「何か聞こえるでしょ？」

確かに、夜の深いしじまの中にパタパタいうくぐもった音が聞こえる。連続して聞こえるが、ずいぶん低くかすかな音だ。

「何だろ？」わたしは小声で言った。

「誰かが来るわ」そう言つと、もう自分を抑えられなくなったように、テーブルの横にひざまずいた。そして、極度の恐怖に駆られたように半狂乱になって、大声で祈り始めたが、時々ヒステリックなすすり泣きに襲われて、言葉を続けることができなかった。その音はだんだん明瞭になってきた。妹の女性特有の鋭い直感とあり、通りに足音を反響させながら誰かがやってくる。休みなく一定の速度で走ってくるところを見ると、緊急の使いに違いない。

突然、それは鈍い音に変わった。最近道に百ヤードほど砂を敷いたのだが、そこまで来たのだろ。そして、またすぐに固い地面を踏む音に変わり、どんどん近づいてくる。

もう小道との分岐点まで来たにちがいない。本道をそのまま進むだろうか。それともブランクサムの方に曲がつてくるのだろうか。そう思った瞬間、靴音が変わり、小道を曲がったのがわかった。明らかに我が家を目指しているのだ。

わたしが庭に飛び出して、門まで駆けつけたと同時に、足音の主は門を開けて入り、わたしの腕に倒れかかった。月の光で見ると、なんとそれはモーダントだった。

「モーダント、どうした？ 何があったんだ？」

「父が…」彼はあえいで言った。「父が…」

目は恐怖に見開かれ、顔は死人のように青ざめている。帽子もなくしてしまったようだ。わたしの腕をつかむ両手は、興奮のあまり震えている。

「とにかく中に入るう」わたしは彼を居間に連れて入った。「少し休んでから話を聞こう。さあ、おちつくんだ。ぼくたちがついてるから」

わたしはモーダントを古い馬毛のソファーに休ませた。一方、妹はさっきの恐怖も忘れ、きびきびとコップにブランデーをついで運んできた。

驚くほどアルコールの効果があり、たちまち類には赤みがさし、目にも光が戻ってきた。

モーダントは起き上がると、まるで悪夢から覚めて自分の身が安全なのを確かめるかのように、両手でエスターの手を握り締めた。

「お父様がどうしたんだい？」

「行ってしまった」

「行ってしまったって?」

「そう、行ってしまったんだ! スミス伍長も一緒に。もう二度と会えない」

「いったいどこに行つたつて言つんだい? 君らしくないじゃないか。こつしている間にも、父上を助けに行かなきゃならない。さあ、行こつ。どこに行つたらいいか教えてくれ」

「もつだめだ」そつ言つと、モータントは手に顔を埋めた。「ぼくを責めないでくれ。

君は何もわかっちゃいない。ぼくたち一家は、不可解で恐ろしい掟に従わなきゃならないんだ。それに逆らつてとなんかできつこないよ。ずっと前から定められていたけれど、ついに運命の日が来たんだ。ああ、神様お助けください!」

「いったい何のことが教えてくれないか」わたしはつい声を強めて言った。「希望を捨てちゃいけない」

「夜が明けたら二人の足跡が見つかるかもしれないけれど、今はどうすることもできない」

「ガブリエルと母上はどつしてる? すぐにここに来てもらった方がいいんじゃないか? 妹さんは恐怖で生きた心地がしないだろう」

「あいつは何も知らないんだ。寝室が反対側にあるから、何も見聞きしていない。母は以前から覚悟をしていたようで、取り乱してはいないよ。もちろん、悲しみに暮れてはいる。でも、今は一人にしておいた方がいいと思う。母の冷静さは見習わなきゃいけないけれど、ぼくは生まれつき感じやすいたちなんだ。長い間さんさん不安におびえたあげくに、この無残な結末で、少々正気を失つてしまったようだ」

「どつせ朝まで待たなきゃならないなら、それまでに何があつたのか全部話してくれよ」

「そうしよう」モータントは立ち上がつて、震える手を火にかざした。「父は、若い頃にあることをしでかして、恐ろしい報復を受けることになった。長い間ぼくたちが心配してきたのは君も知ってるだろう? それにはスミス伍長も関わっていた。だから、伍長が父を訪ねて来たつてことは、その時が来たのを予告していたんだ。今度こそ、十月五日に罪を償わなければならぬことをね。十月五日はその出来事があつた日だ。父の恐怖については手紙でも書いたし、父からも直接聞いていると思う。」

昨日の朝、父はアフガン戦争以来しまいこんでいた軍服を着こんでいた。それを見て、いよいよ最期だなと確信した。午後になると、父はこしばらく見たことがなくらい落ち着いた様子で、インドでの暮らしや若いころの話などを色々聞かせてくれた。そして九時頃ぼくたちを寝室に行かせて、外から鍵をかけた。恐怖の発作に襲われると、いつもそうしていたんだ。自分に降りかかる災厄からぼくたちを守るうとしてたんだね。部屋に行く前に、父は母とガブリエルを優しく抱きしめてから、ぼくの部屋の前までついて来た。そして、ぼくの手を愛情を込めて握ると、君あての小さな包みを手渡した」

「ぼくあてだつて？」

「そうなんだ。後で渡すよ。でも、まあ最後まで話を聞いてくれ。ぼくは何が起きてもかまわない、一緒にいさせてくれと言つたんだ。でも、父は頼むから自分の邪魔をしないでくれと言つてきかなかつた。かえつて父を苦しめることになると思つて、しぶしぶドアを閉め、外から鍵をかけてもらつたことにした。あのとき、なんで父のいいなりになつてしまつたんだろうと後悔している。でも、向こうが助けはいらなと言つたに、無理強いはできなかったんだ」

「あなたはできる限りのことをしたわ」妹が言った。

「そう思いたいけれど、どうすればよかつたのかは誰にもわからない。廊下を遠ざかつていく父の足音が聞こえた。たぶん十時頃だつたと思つ。しばらく、部屋を歩き回つたあと、ランプを枕元に置いて、服を着たまま寝転がつてトマス・ア・ケンピスの本を読んだ。今晚が無事に過ぎますようにと懸命に祈りながらね。

そのうち、いつの間にかうとうととしてしまった。突然大きな音がして目を覚ました。急いで起き上がったが、あたりはまた静まり返つている。ランプの灯は燃え尽きようとしていて、時計を見ると真夜中近かつた。あわてて立ち上がり、とにかく蠟燭をつけようとマッチをすろつとしたとき、耳をつんざくような叫び声が聞こえた。あまりに間近で響いたから、自分の部屋から聞こえたのかと思つたよ。母と妹の部屋は屋敷の裏側にあるが、ぼくの部屋は表側にあつて並木道が見える。

窓に駆け寄ると、フラインドを上げて外を見た。門のところから、砂利を敷いた広い馬車道が玄関まで続いているだろう？ あの道の真ん中に三人の男が立っていたんだ。月光に目を輝かせながら、屋敷を見上げている。浅黒い顔に黒い髪。シーク人やアフリデイ人によくいるタイプだ。そのうちの二人はやせていて、一心に上を見つめるその顔は整つていた。残る一人は堂々とした押し出しで、長いあごひげをはやした気品のある男だつた」

「ラム・シンド！」わたしは叫んだ。

「えつ、知つてるのか？」モーターントは驚いて言った。「連中に会つたことがあるのかい？」

「知つてる。仏教の僧侶だ。で、どうしたんだ？」

「二人は並んで腕を上下に振りながら祈りか呪文を唱えるように唇を動かしていた。そして、突然その動作をやめたと思つと、さっき聞こえたと同じ不気味な叫び声を三回あげた。その声は静寂を破つて、ますます大きく甲高くなつていった。あの声は二度と忘れられないだろう。今でも耳について離れない」

「やがてその声がゆっくりと消えていくと、鍵をあげる音に続いて、ドアのあく音、あわただしい足音が聞こえた。父と伍長が乱れた髪に帽子もかぶらず、狂つたように家から飛び出してきた。突然、どうしようもない衝動に駆られたみたいだつた。父たちは三人と一緒に早足で並木道を抜け、木立の中に消えてしまった。強制されたわけでもな

いの、手錠をはめられたみたいは無抵抗で連れて行かれたんだ。

すべてがあつという間だった。最初に呼び声をしてぼくが目を覚ましてから、五人が姿を消すまで五分はかからなかっただろう。またたく間に不思議な出来事が起こったから、最初悪夢か幻を見たのかも思れないと思った。でも、それにしてもあまりに生々しい印象だった。

すぐに寝室のドアに体当たりした。最初はびくともしなかったが、何度もやっているうちに鍵が壊れて廊下に出られた。まず母のことが気になって、母の部屋に駆けつけて鍵を開けた。開けると同時にガウン姿の母が飛び出してきて、人差し指を立てた。

『しっ！ガブリエルが寝てるわ。二人とも呼び出されて行ったのね？』

『ええ』

『神様の申し召しなのよ！お父様はあの世に行かれたほうが幸せになるでしょう。ガブリエルが眠っていてよかった。ココアに睡眠薬を入れておいたの』

『ぶっしたらいいんでしょ？』ぼくはうるたえて言った。どこに行ったのです？なんとか助けられませんか？このまま連れて行かせるなんてことはできません。あいつらの好きなようにはさせない。ウィゲタンまで行って、警察をたたき起こしましょうか？』

『だめ、それはいけない』母は必死に言った。『それだけはするなと再三言われているのです。お父様にはもう二度と会えません。おまえはわたしが泣いていないのを不思議に思うでしょうが、お父様はあの世に行くしか苦しみから解放される方法がないのです。だからそんなに悲しむことはありませんよ。後を追っても仕方ないけれど、最後を見届けなければなりません。でも、できるだけ人目につかないようにね。お父様の願いをかなえてさしあげることが一番なのです』

『でも、今は一刻を争います。あの悪魔たちから逃げようとして、助けを求めているかもしれない』

ぼくはいてもたってもいられなくなって、家から飛び出して街道に出た。でも、どこに行ったらいいかわからなかった。目の前にはどこまでも荒野が広がり、何一つ動くものはなく、耳を澄ましても何の物音もしない。

途方にくれて立っていたとき、急に恐怖に襲われ、同時に自分の責任の重さも感じた。わけのわからない力と戦っていることが不思議でならず、恐ろしくなったんだ。

そのとき、君のことが頭に浮かんだ。君なら何か助けになってくれるかもしれない、そう思ったら、希望がわいてきた。フランクサムに行けば話を聞いてもらえるし、どうしたらいいか教えてもらえるだろうと思った。なにしろ頭が混乱していて、自分で正しい判断ができる状態じゃなかったからね。母は一人にしても大丈夫だったし、妹は寝ている。そして、夜明けまでは何も打つ手がない。だから、君のもとに駆けつけたというわけだ。なあ、ジャック、君は頭がいい。何かいい案があったら教えてくれ。エスター、ぼくはどうすればいいだろう？』

モータントは両手を伸ばし、懇願するようにわたしたちを交互に見つめた。

「夜明けまでは何もできないな。いずれにしても、ウイグタンの警察には届けなければならぬ。でも、使いを出すのは自分たちで探してからにしよう。それなら、法には触れないし、お母様の願いを入れることにもなる。丘の向こうのジョン・フラートンという男が、優秀なブラッドハウンド犬を飼っている。その猟犬に跡を追わせれば、ジョン・オグローン(イングランド最北端の地)までだって行くだろう」

「今助けを求めているかもしれないのに、じっとしているなんて耐えられない」
「助けに行ったところで、役に立たないような気がするけれどね。人間ではどうしようもない力が働いているんだ。他に方法はない。どっちに行ったか何の手がかりもないんだろう？ 暗闇の中、いたずらに荒野をさまよつより、朝になってからその労力を使った方がいい。五時には夜が明ける。あと一時間したら、フラートンの犬を借りに行こうじゃないか」

「あと一時間も待つのか！ モータントはうめいた。「一分がものすごく長く感じるよ」

「ソファに横になっているといい。父上のためを思うなら、今のうちに休んでおかなきゃね。うんと歩くことになるかもしれないから。そういえば、將軍からばくあての包みを預かつたって言ってたね」

「これなんだ」モータントはそう言つと、ポケットから小さな平たい包みを取り出し、手渡した。「それを読めば、すべての謎が明らかになるはずだよ」

包みの両端には黒い封蝋が施され、將軍の紋章である飛翔するグリフィンの印が押されていた。嚴重に縛つてあつた幅広のひもを、ポケットナイフで切つた。包みの表には、大胆な筆跡で次のように書かれていた。

『J・フォザギル・ウエスト君へ』

ただし、元インド陸軍、ビクトリア十字勲章、バス勲位、陸軍少将J・B・ヘザスターンが失踪もしくは死亡の場合手渡すこと』

わたしたちの人生に暗い影を投げかけた恐ろしい謎が、とつとつ明らかになるのだ。その鍵が今この手の中にある。

もどかしい思いで封をはがし、包みを解いた。一通の手紙と色褪せた紙の束が出てきた。ランプを引き寄せて、まず手紙を開けてみた。昨日の午後の消印だ。

ウエスト君

君が例の件について知りたがつていたのに、今までわたしが話さなかつたのは君のためにならないと思つたからだ。確実に訪れることがわかつていて、避けることも早めることもできない破局をただひたすら待ち続けることが、いかに不安で落ち着かないものであるか、自分の悲しい経験からよく知っている。

当事者として、君に黙つてることが常に心に引つ掛かつていた。君がわたしに同情

を寄せ、ガブリエルの父としてのわたしへ、敬意を払ってくれたことには感謝している。しかし、だからこそ、わたしが曖昧でしかも絶望的な運命に脅かされていることを話して、君を苦しめたくなかったのだ。たとえ孤独になったとしても、わたしにとってそれは何でもなかった。

しかし、多くの兆候によって、何より今朝君から仏僧が海岸に到着したと聞いたことで、とうとう猶予の期間は終わり、執行のときが来たのを知った。わたしが罪を犯してから、なぜ四十年近くも生かされてきたのか、それはわたしのあずかり知らぬところだ。たぶん、わたしの運命を握っている者たちは、それが一番の刑罰になることを知っているのだらう。

昼も夜も絶え間なく、自分が彼らのいけにえであることを忘れたことはなかった。あの恐ろしい鈴の音は、四十年間甲いの鐘として鳴り続けて、この世に安住する地はないことをわたしに思い知らせた。ああ、安らぎがほしい！それが得られるなら、死も救いだ！その先に何が待っているかが、あの恐ろしい鐘からは解放されるのだから。

ここで、一八四一年十月五日に起こった出来事や、聖者グーラブ・シャーを死に至らしめた事情を詳しく語る必要はないだらう。そのかわり、当時の日記から数ページを破り取っておくので、それを読めば真相がわかるはずだ。また、数年前に「スター・オブ・インド」の紙上に匿名で掲載された、騎兵隊のサー・エドワード・エリオットの談話も添えておく。

その記事が出た時、インドをよく知る人々も含めて、多くの人がサー・エドワードは作り話をしていると思ったようだ。しかし、同封したわたしの古い日記は、それが間違いであることを示している。そして、西洋文明には知られていないが、人間の行使する力や法則が計り知れないものであることを、科学者は認めるべきだとわかるだらう。

泣き言を言うつもりはないが、現世では運がなかったと言わざるを得ない。神に誓うが、わたしは平然と人の命を奪うような人間ではない。相手が老人ならなおさらだ。しかし、元来激しやすい上に頑固な性質で、いったん頭に血が上ると、わけがわからなくなってしまうところがある。もし、グーラブ・シャーの後ろに部族民が集結していなければ、伍長もわたしも指一本触れなかったらと思う。いや、すべて終わったことだ。今さらどうこう言っても仕方がない。今後、わたしのような不運な人間が現れないことを祈るだけだ。

なお、君やこの事件に興味を持つ人々のために、日記に簡単な補足を加えておいた。では、さらば！ガブリエルの良き夫になってくれたまえ。そして、妹さんにこんな呪われた家族の一員になる勇氣があるなら、せひそつしてもらいたい。哀れな我が妻には、不自由なく暮らせるだけの財産を残してある。妻の死後、財産は子供たちの間で等分されることを望む。わたしの最期を聞いても、悲しまずに祝福してもらいたい。

ジョン・バーシア・ヘザストーン

わたしは手紙を置くと、謎を解き明かす日記帳の青い紙束を手にとった。破り取った部分はぎざぎざで、まだ糊や綴じ糸がついており、明らかに頑丈に製本されていたことがわかる。インクの字は少し色あせていたが、最初のページの上部には、明らかに後から加えたと思われるはつきりした太い字で、次のように書いてあった。

「一八四一年秋、テラダ峡谷における陸軍中尉J・B・ヘザストーンの日記

この抜粋は、同年十月第一週に起こった事件の概要に関するものであり、テラダ峡谷での戦闘及びグーラブ・シャアの死も含んでいる」

今、わたしの目の前には、その日記があるが、以下にそれをそのまま引用することにする。直接事件とは関係ない記述もあるかもしれないが、勝手に手を加えたということに責任を問われるより、原文のまま発表した方がいいと思うからだ。